



Haf a A d a i

令和5年12月22日
グアム日本人学校
学校だより
1月号
校長 井手瑞樹

純粋な心と深い愛情

令和5年11月29日（水）、アメリカの労働に関する法律の専門家であり、本校の学校理事会理事でいらっしゃる伊藤 敏江 様に本校においていただき、中学部の生徒たちに対して、社会で働くためのマナーのひとつについてお話しいただきました。その内容は、あいさつを含めた言葉の発し方についてでした。つまり、様々な場面に応じてどのような態度で、どのような声をかけたり、声を返したりすれば相手に良い印象を与えられるかという講義と演習でした。翌日がJALへの職場体験ということで生徒たちの表情は真剣そのものでした。また、社会では一般に行われていることであっても、生徒たちにとっては新鮮な感覚であったようです。伊藤様によれば、自分の言葉がどんどん生徒たちの中に吸い込まれていく感じだったということです。普段大人を相手に仕事をされていて、曇った鏡に向かって話している感覚が、この日はまるで澄み切った鏡に向かって話している感覚を味わわれたのかもしれない。「心が洗われたようでした」と率直な感想を私に伝えてくださいました。



さらにこれには話の続きがあります。伊藤様は、その日の夜に起きた事を話して下さいました。

「私（伊藤）は、なぜか深夜を過ぎても、何かが気になって全く眠れません。学校で接した生徒さん達のイメージが、どうしても頭から離れないのです。講義中、真剣に練習している生徒さん達の姿や、若い声の響きや、見守る先生達の雰囲気、私の中にスッポリ入り込んでしまったという感じです。午前2時になっても3時になっても眠れません。4時ぐらいになって、少しうとうとし始めた頃です。生徒さん達が集まって、私に向かって『おばさん、大丈夫だよ。自分を信じていいよ』と話しかける声が聞こえて来たのです。私はえっと驚いて目が覚めてしまいました。丁度その頃、私は決めかねていた事があり、とても悩んでいました。しかし、その声を聞いた時、私はその意味が何なのかピンと来ました。そして、すぐに決心がつき、心が晴れ晴れし、嬉し涙があふれ出て来ました。心が洗われ、どんよりした霧が消えて、自分がどうすべきかが瞬時にわかったのです。私は子供時代を経験したはずなのに、純粋さというものをどこかに置き忘れていたような気がします。しかし、生徒さん達とのふれあいのおかげで、それをよびさますことになりました。このような体験をさせて頂いて、お礼を言いたいのは、この私の方ですね。」



私は、子どもたちのこの純粋さこそが学びには重要だと思います。学校では、理想を教え、人としての在り方を説き、素直に学ぶ姿勢を身につけさせることが、次の世代を担っていくとても大切な要素であると考えています。確かに、社会は理想のようにはいかないものです。醜い部分も多いですが、それらは彼らが人生経験の中で、徐々に知っていけばいいものだと思います。ただ、身に危険が及ぶようなことは事前に教えておく必要があるのはいうまでもありません。純粋で、素直な心こそが、相手を尊敬し、その人から学ぼうとする姿勢へとつながって、その子を大きく育てていく要因となること、そのことはまた、運命的な人との出会いへとつながって、自らの人生を大きく変えていくことに発展していくのだと私は信じています。

<裏に続く>

我々は子どもたちを、深い愛情を持って、彼らが幼いときから徐々に、手を離さず、目を離さず、心を離さずに見守り続けることが大切なことだと思います。

佐賀県出身の社会教育家で作家だった「下村湖人」が、小説「次郎物語」の中で、亡くなっていく次郎の母親に、病床の中から言わせている言葉があります。私には印象深く残っていますが、それは、周りからひたすら厳しく育てられていた次郎に対し、ただ一人、深い愛情を与え続けた次郎の父親の姿を思い浮かべながら、次郎の母親が「子どもは、ただ、愛してやればいいのですね・・・。」と亡くなっていく場面です。

深い愛情には、深い意味がありますが、子どもには深い愛情をかけて育てることが基本であることに間違いはありません。

伊藤さんの耳元に現れた生徒たちも、きっと深い愛情で育てられているのでしょう。

